

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03414

研究課題名(和文)雇用多様化社会における社会的地位の測定

研究課題名(英文)Measuring Social Status in Contemporary Japan

研究代表者

元治 恵子(GENJI, Keiko)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：60328987

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「職業に関する意識調査」を実施し、従来の職業威信スコアのバージョンアップを行うとともに、職業構造の変化に対応する、職種に加え、性別、雇用形態、企業規模などを反映した社会的地位尺度を作成した。職業威信スコアは、性、年代、学歴別では、グループ間に高い相関が見られ、時点間でも変化は見られず、スコアの頑健性と信頼性が改めて強調されることになった。しかし、性別、雇用形態、企業規模の情報が評価職業に付与されていた場合には、同じ職業であっても人々の評価に違いが見られた。多元的地位尺度を測定した職業以外に拡張し、さらに精緻化していくことが喫緊の課題である。

研究成果の概要(英文)：The aims of this research project are to update occupational prestige scores and to construct a new scale of social status by using data of the 2016 Social Status Survey. The main findings are as follows: (1) There are considerably high correlations in the occupational hierarchy by subsamples, (2) The robustness and reliability of the occupational prestige scores are reinforced, (3) Some occupational prestige scores with gender, employment status or company size were different from original occupational prestige scores. The construction of new scale (multi-dimensional social status scale) for prestige and socioeconomic status is urgent matter.

研究分野：社会学

キーワード：社会的地位 階級・階層 社会移動 社会ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

ここ 20 年、経済状況の悪化や低迷、新自由主義政策の展開、グローバル化の進展により日本の雇用構造は大きく変化している。特に、非正規雇用労働者の増大、女性就業者の増加、産業構造の変化に伴う新しい職業従事者の増加など、労働者の状況は多様化している。これまで新卒一括採用という慣行のもと、正規雇用の男性を主要な基幹的労働者として育成してきた企業システムに変化が起きていることを示している。これらのことにより人々の間に、正規雇用労働者と非正規雇用労働者間の所得格差、若年層内部での格差や若年層と他世代との世代間格差など、さまざまな格差が生じている。どのような職業に従事しているかによる経済的格差をはじめ、人々の生活の多様な側面に格差を生みだしていると考えられる。個々の人々がおかれている状況、つまり、社会において、どのような位置にあるのかを的確に把握し、その対策を講じることが急がれている。

これまで、「職業」が、現代産業社会における人々の社会的地位をとらえる主要な指標として認識され、階層構造を説明するとともに、人々の意識や行動を規定するもっとも重要な変数として利用されてきた。職業を社会的地位の指標として用いるためには、さまざまな方法により尺度化されうる。中でも多くの研究に利用されてきた「職業威信スコア」は、職業の社会的評価の高低や序列関係を 1 次元的に把握することを目的に、人々の職業に対する客観的な社会的評価から、職業ごとに平均的な評価尺度を作ることにより得られる尺度である。日本では、1955 年に「社会階層と社会移動全国調査プロジェクト (Social stratification and social mobility survey: SSM 調査)」において 32 職業、その後 1975 年に 82 職業、1995 年に 56 職業について調査され、その結果から、職業小分類の個々の職業に対し職業威信スコアが算出された。また、アメリカをはじめとするさまざまな国や地域においても職業威信調査が実施され、職業威信スコアが、時代(元治・都築, 1998; Nakao & Treas, 1994 など)、評定者の社会的属性 (Bose & Rossi, 1983; 元治・都築, 1998 など)、産業化や国民総生産のレベルの異なる国々(元治, 2011; Treiman, 1977 など)の差異にほとんど影響を受けず、かなり安定した有効な尺度であることが、明らかになっている。

しかし、先に述べたように、これまでに社会階層状況を理解・説明するために利用されてきた職業威信スコアは、職種についてのみの評価から算出されたものである。日本が伝統的に大企業と中小企業という二重労働市場であること、1990 年代半ば以降に顕著な非正規労働者の増加とそれが男女や年齢によって異なることなど、現代日本の労働市場の状況を鑑みれば、職種のみから社会的地位を測定し、その尺度を利用して階層構造や社

会の状況をとらえることには限界が生じている。つまり、的確に現代日本の階層状況を把握し、説明しているとは言い難い。

同じ問題意識から、中尾(2003)は、新しい職業威信スコア(社会的地位)の検討を行い、職種、産業、企業規模を考慮した多元的威信スコアを提案している。職種とともに、産業や企業規模が、それぞれの職業の社会的地位を規定する大きな要因であることが明らかになっており、多元的に職業的地位を考える必要があることを示唆している。また、脇田(2012)は、性別情報を付記した職業に対する評定と評定対象職業の性別構成との関連を検討し、女性比率の高い職業の場合、職業威信スコアの差が明瞭に見られることを明らかにした。性別を考慮した職業威信スコアを検討する必要性が示唆される。以上のように、職種のみならず、性別、雇用形態など、多元的に職業をとらえ、それを反映した社会的地位(狭義には職業的地位)を尺度化する必要性が増している。そして、さまざまな分野で利用されている職業威信スコアは約 20 年前に測定、尺度化された指標であり、ここ 20 年の産業構造の変化による職業構造の変化に対応できていない。たとえば、福祉関係や IT 関係の職業において顕著に見られる新しい職種には、職業威信スコアを代替的に当てはめ、分析に利用している状況である。また、評定者側のおかれている状況も大きく変化している。評定者側の特性(属性など)の影響も、以前とは異なったものとなっている可能性もある。これらの点からも新たな社会的地位を測定する必要性があると考える。

2. 研究の目的

1990 年代半ば以降、経済状況の悪化、新自由主義政策、グローバル化の進展により日本の雇用構造は大きく変化している。特に、非正規雇用労働者の増大、女性就業者の増加、産業構造の変化に伴う職業構造の変化など、労働者の状況は多様化している。これまでのように、職種のみから社会的地位を測定し、その尺度を利用して階層構造や社会の状況を捉えることには限界が生じており、的確に現代日本の階層状況を把握し、説明しているとは言い難い。本研究では、従来の職業威信スコアのバージョンアップを行うとともに、職業構造の変化に対応する、職種のみならず、性別、雇用形態などの面から、職業を多元的にとらえ、それを反映した社会的地位尺度(多元的職業威信スコア)を作成し、その妥当性や有効性を検証するとともに、現代日本社会の階層構造や社会状況を再検証することを目的とする。

3. 研究の方法

初年度(2015 年度)後半に、予備調査の実施とデータ作成を終了した。予備調査では、職業威信スコアの多元化を試みた。具体的に

は、「1995年SSM調査」以降に新しく出現した職種と消滅した職種を洗い出し、評定対象となる職種を選出し、職種以外の項目（ジェンダー、雇用形態、企業規模など）を組み合わせたものについても調査した。

2年目（2016年度）には、職業構造の変化（非正規雇用労働者の増大、女性就業者の増加、産業構造の変化など）に対応する職種に加え、性別、雇用形態、企業規模などを反映した社会的地位尺度（多元的職業威信スコア）を作成するため、「職業に関する意識調査」を郵送調査により実施した。全国200地点3000名を調査対象とし1179名の回答を得た（回収率39.3%）。評定職業数を確保するため、全標本を5つの部分標本として、それぞれ異なる調査票により調査を実施した。各調査票には共通評定職業を設定し、部分標本間の職業評定に関する差異などが確認でき、補正なども可能となるようにした。調査票による回収数の偏りが当初懸念されたが、5つの調査票ともほぼ同程度の回収数を確保できた。また、評定対象職業選定にあたっては、初年度に実施した予備調査の分析結果や職業構造などを参考にした。

最終年度（2017年度）は、2016年度に実施した調査データを分析しながら研究を進め、結果をまとめ報告書を作成した。

4. 研究成果

（1）職業評定のされ方や多元的地位指標（職業威信スコア）の基本特性について明らかにした。職業評定カテゴリーの使われ方は、1995年と比較しても大きな違いは見られなかった。評定基準では、今回新たに追加した項目が影響したのか、重視される程度が減少した項目も見られ、また男女で重視した評定基準が異なる傾向も見られた。性、年代、学歴別に職業威信スコアの違いを比較すると、個々の職業については各属性内のカテゴリー（グループ）の違いによるスコアの違いが見られるものもあったが、職業の威信構造全体ではかなり高い相関関係が見られ、スコアの頑健性が改めて強調されることとなった。しかし、同じ職種（職業）であっても雇用形態や企業規模の違いにより人々の評定は異なった。職業的地位を人々の社会的地位として研究を蓄積してきた社会階層研究においても、階層構造や社会状況を再検証することの必要性が示唆される。今後、多元的地位尺度を調査した職業以外にも拡張し、さらに精緻化していくことが喫緊の課題である。（元治恵子「職業評定および多元的地位指標（職業威信スコア）の基本的特性」）

（2）社会階層研究で用いられてきた職業威信スコアの時点間変化について検証をおこなうことである。具体的には、1975年と95年の「社会階層と社会移動全国調査」（SSM調査）威信票と2016年に実施された「職業に関する意識調査」のデータセットを用いて、

職業威信スコアの序列構造とばらつきにかんして時点間比較分析を行った。分析結果より得られた知見は、以下の諸点にまとめられる。第1に、職業威信スコアの序列構造は時代を通じて極めて安定的であった。各時点間の職業威信スコアの相関係数は極めて高く、同スコアの分散も時点間で顕著な変化が見られなかった。第2に、1975年から95年にかけて職業威信スコアの平均的な上昇が観察された。その内実は、職業階層の中でも低階層に占める職業に対する人びとの評価水準が向上したことで生じていた。一方で、こうした職業威信スコアの底上げは1995年から2016年にかけては認められない。以上より、非正規雇用者の割合や女性の社会進出といった労働市場の変化がより一層進行した2000年代においても、先行研究が繰り返し指摘する職業威信スコアの頑健性と信頼性が本稿の分析からも支持された。（三輪哲・斉藤知洋「職業評定にかんする時点間安定性の再検討」）

（3）職業威信秩序の自明性が時代や社会人口学的なカテゴリーによって異なるのか検討した。まず職業威信秩序の自明性を測るための指標について検討し、二種類の級内相関係数が指標として適切であると主張した。次にこれらの指標を使い、1975、1995、2016の三時点の職業威信評定を比較した。すると、1995年で残りの2時点よりも自明性が高かった。また、社会人口学的カテゴリーによる違いを見ると、低学歴者よりは高学歴者、低収入者よりは高収入者、中高年よりは若者の間で自明性が高い、という結果が得られた。また、従業上の地位に関しては、役員等、正規、非正規、といった職場のヒエラルキーと関わる人たちのあいだで自明性が高く、無職と自営のように職場ヒエラルキーとのかかわりが薄そうな人たちのあいだで低かった。（太郎丸博「職業威信秩序の自明性と中心/周辺1975-2016」）

（4）現代日本社会におけるジェンダー・ステレオタイプの職業威信スコアに対する影響を検討した。34の職業について、男性評定対象および女性評定対象に対する職業威信スコアを比較し、その職業の就業者に占める女性の比率などの職業の性質、および評定者の性別などの属性の影響を分析した。分析の結果、以下の3点が明らかになった。第1に、ジェンダー・ステレオタイプの影響は女性職について認められ、男性職については認められなかった。すなわち、女性の就業者の比率が非常に高く、人々に「女性らしい」と考えられている職業においては、女性評定対象が高く評価される傾向が見られた。第2に、ジェンダー・ステレオタイプ以外の要因が、評定対象の性別による職業威信スコアのの違いに影響している可能性が示唆された。第3に、女性が女性評定対象および女性職をより高

く評定しているなど、評定対象のジェンダー・ステレオタイプに関する変数の効果は、評定者の属性とも関連していることが示された。これらのことは、就業者に占める女性が多い職業について、評定対象の性別による職業威信スコアの差は、ジェンダー・ステレオタイプによって説明されることを示唆している。しかし、ジェンダー・ステレオタイプによって説明されない評定対象の性別の影響や、評定者の属性の影響も見られることから、評定対象の性別による職業威信スコアの差についてさらなる研究が必要である。(脇田彩「職業威信スコアとジェンダー・ステレオタイプ」)

(5) 近年、脱工業化が進展し、対人サービスに従事する労働者が増加している。本研究では、サービス職の職業威信に注目し、他の職業と比較してサービス職の威信がどの程度低いかを確認するとともに、職業の特性の違いによってサービス職の威信の低さがどのくらい説明されるのかを検討した。本稿の分析から、非熟練サービス職の職業威信スコアは低いことがわかった。また、非熟練サービス職の職業威信の低さは収入と高学歴者比率の低さ、そして女性比率と非正規雇用比率の高さによってもたらされていることがわかった。一方、対人サービスに従事する専門職である社会文化的専門職の職業威信は高く、技術専門職や管理職と同程度であった。社会文化的専門職の威信の高さは、収入や高学歴者比率の高さによってもたらされていた。一方、女性比率の高さは逆に、社会文化的専門職の職業威信を引き下げていることも明らかになった。(長松奈美江「サービス職の職業威信はなぜ低いのか」)

(6) 職業威信の測定に関して、特に職業の提示順序の影響(順序効果)の有無を確認するものである。職業威信の測定についてはこれまで、職業名を書いたカードをシャフルして(ランダム化)した上で対象者に手渡し、「はしご」に配置させる方法(アメリカのGSS調査やSSM55、SSM75など)や、紙の調査票で職業の提示順序が固定されているもの(SSM95)など、いくつかの方法で行われてきた。どの方法においても回答者は、個別の職業の評定を、他の項目との比較の上で行う可能性がある。そのため、最初に提示された項目が基準(アンカー)となる「アンカー効果」や、直前の項目との比較による直前項目の影響(キャリアオーバー効果)など提示順序が回答に影響を与えることが想定される。その問題について、後者のカードをシャフルする方法であれば提示順序はランダム化されるため、順序効果も基本はランダムに発生する誤差の一つとして、キャンセルされると考えられている。一方、1種類の紙の調査票で提示順が固定されている場合、上記の効果もまた固定されており、その分離は不可能で

ある。それに対して今回のデータは、3種類の調査票で、10個の職業については共通して測定している。その10個の共通項目に対する評定を用いることで、個別項目の測定に対するアンカー効果とキャリアオーバー効果の有無を分析した上で、その大きさが推定可能かを考察した。(田辺俊介「職業威信の測定論：アンカー効果とキャリアオーバー効果に着目して」)

(7) 2016年の威信調査をもとに、6つの要件(職業リストに挙げることが可能な職業数、現代に存在する職業、威信スコアの範囲と等しい間隔、家族・親戚・友人・知人の職業としての認知どの高さ、家族・親戚・友人・知人である場合に職業評定値が変化しない職業、職業分類の偏りが無い)をある程度満たす職業25個を抽出し、汎用版のポジション・ジェネレータの作成を試みた。(辻竜平「汎用版ポジション・ジェネレータの作成」)

<参考文献>

Bose, Christine E. & Rossi, Peter H.. 1983. "Prestige Standings of Occupations as Affected by Gender," *American Sociological Review* 48: 316-330.

元治恵子. 2011. 「職業評定の国際比較 日本・韓国・アメリカの3国間比較」石田浩・近藤博之・中尾啓子(編)『現代の階層社会2 階層と移動の構造』東京大学出版会. 301-316.

元治恵子・都築一治. 1998. 「職業評定の比較分析-威信スコアの性差と調査時点間の差異」都築一治(編)『1995年SSM調査シリーズ5・職業評価の構造と職業威信スコア』1995年SSM調査研究会. 45-68.

中尾啓子(編). 2003. 『現代日本における社会的地位の測定』.

Nakao, Keiko & Treas, Judith. 1994. "Updating Occupational Prestige and Socioeconomic Scores: How the New Measures Measure Up," *Sociological Methodology* 24: 1-72.

Treiman, Donald J.. 1977. *Occupational Prestige in Comparative Perspective*. Academic Press.

脇田彩. 2012. 職業威信スコアのジェンダー中立性 男女別職業評価調査に基づく一考察」『ソシオロジ』ソシオロジ編集室. 第五七巻二号: 3-18.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

辻竜平. 2018. 「入職経路と産業の地位達成への効果：社会関係資本活用の有効性

の検討」阪口祐介編『2015年SSM調査報告書6 労働市場I』2015年SSM調査研究会: 137-164(査読無).
(http://www.l.u-tokyo.ac.jp/2015SSM-PJ/06_08.pdf)
高橋和子・多喜弘文・田辺俊介・李偉・2017「社会学における職業・産業コーディング自動化システムの活用」『自然言語処理』Vol.24 No.1: 135-170(査読有).
三輪哲・2016「非典型雇用者の階層構成と社会移動の趨勢」『日本労働研究雑誌』672: 14-28(査読有).

〔学会発表〕(計 20件)

元治恵子・三輪哲・2017「『多元的職業威信スコア』の開発とその特徴」第64回数理社会学会大会(札幌学院大学).
辻竜平・2017「交友関係の有無による職業威信評価の変化」第64回数理社会学会大会(札幌学院大学).
脇田彩・2017「ジェンダー・ステレオタイプと職業威信スコア」第64回数理社会学会大会(札幌学院大学).
太郎丸博・2017「何が階級的ヒエラルキーの自明性を支えるのか? 職業威信評定の間主観的な一致度と中心/周辺」第90回日本社会学会大会(東京大学).
元治恵子・2017「職業評定における全職業同一評定者の特徴」第63回数理社会学会大会(関西大学).
元治恵子・2016「職業イメージに関する一考察」第62回数理社会学会大会(金沢大学).
Nakao, Keiko, Takuya Hayashi, Aya Wakita and Yuya Saitoh・2016「Trend in the Effect of Education on Occupational Attainment in Japan」111th American Sociological Association Annual Meeting(Seattle).
脇田彩・2015「評定対象・評定者のジェンダーが職業威信スコアに与える影響」日本行動計量学会第43回大会(首都大学).

〔図書〕(計 8件)

元治恵子・2017(石田浩(監修)・佐藤香(編))『ライフデザインと希望 [格差の連鎖と若者]』260(109-132) 勁草書房.
太郎丸博(編)・2016『後期近代と価値意識の変容: 日本人の意識 1973-2008』240. 東京大学出版会.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)
取得状況(計 0件)

〔その他〕

元治恵子(編著)・2018『雇用多様化社会における社会的地位の測定』(研究成果報告書).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

元治 恵子 (GENJI, Keiko)
明星大学・人文学部・教授
研究者番号: 60328987

(2) 研究分担者

辻 竜平 (TSUJI, Ryuhei)
近畿大学・総合社会学部・教授
研究者番号: 40323563

太郎丸 博 (TAROUMARU, Hiroshi)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 60273570

三輪 哲 (MIWA, Satoshi)
東京大学・社会科学研究所・教授
研究者番号: 20401268

田辺 俊介 (TANABE, Shunsuke)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 30451876

長松 奈美江 (NAGAMATSU, Namie)
関西学院大学・社会学部・准教授
研究者番号: 30506316

(3) 連携研究者

脇田 彩 (WAKITA, Aya)
立教大学社会学部 助教
研究者番号: 00750647

(4) 研究協力者

斉藤 知洋 (SAITOH, Tomohiro)